

福岡市埋蔵文化財調査報告書第611集

TA MURA  
田 村 14

——田村遺跡群第20次調査——

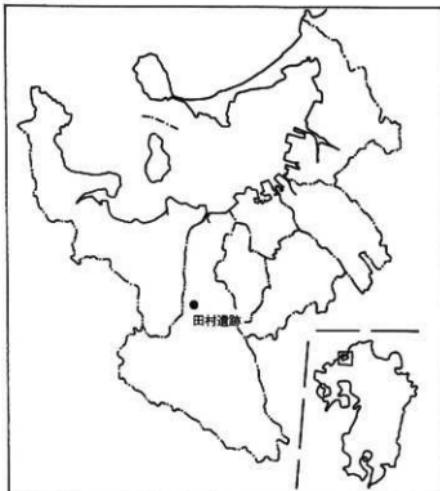
1999

福岡市教育委員会

TA MURA  
田 村 遺 跡 14

— 第20次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第611集



遺跡略号 TMR-20

調査番号 9748

1999

福岡市教育委員会

## 序

九州の中核都市として発展をつづける福岡都市圏の人口は増加の一途をたどっており、これにともなう住宅化によって消滅していく遺跡も多く、本市ではこれら開発によってやむなく失われる遺跡の記録保存につとめているところであります。

本書は民間の共同住宅建設に際し、発掘調査を実施した田村遺跡群第20次調査の調査報告書です。

調査の結果、弥生時代の集落が検出され、遺跡群内の集落を研究するうえで貴重な資料を得ることができました。

つきましては、本書が埋蔵文化財に対する理解の一助となるとともに、学術研究においても活用していただければ幸いであります。

また、調査に際しましては費用負担をしていただいた岩室シヅ子様をはじめ多くの方々のご理解とご協力を賜りました。心より感謝の意を表する次第であります。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

## 例　　言

1. 本書は福岡市早良区田村4-673-1地内における店舗兼共同住宅の建設に伴い、福岡市教育委員会が平成9年10月20日から同年11月14日にかけて調査を実施した田村遺跡の第20次調査の報告である。
1. 本書で用いる方位は国土地理院座標第2系の座標北で、磁北はこれに6°2'西偏する。
1. 調査区内のグリッド名称は3m方眼線の北西交点とした。
1. 遺構の呼称は記号化し、竪穴住居→SC・土壌SK・溝→SD・柱穴→SPとし、遺構番号は記号のあとに順次続けた。
1. 本書に使用した遺構実測図は、加藤良彦・栗木和子・三谷朗子・辻節子による。
1. 本書に使用した遺物実測図は、加藤・山崎賀代子・平川敬治による。
1. 本書に使用した製図は、加藤・山崎・池田美紀による。
1. 本書に使用した写真は、加藤・平川による。
1. 本書の執筆編集は加藤が行った。
1. 本書にかかる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

## 本文目次

I.	はじめに.....	1
1.	調査に至る経緯.....	1
2.	調査の組織.....	1
II.	調査区の立地と環境.....	2
III.	調査の記録.....	5
1.	調査の概要.....	5
2.	弥生時代の調査.....	5
3.	その他の出土遺物.....	18
IV.	小結	

## 挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/50,000) .....	3
Fig. 2	調査区位置図 (1/8,000) .....	3
Fig. 3	遺構全体図 (1/200) .....	6
Fig. 4	西壁上層断面 (1/40) .....	8
Fig. 5	SK01・03・04・26 (1/40) .....	9
Fig. 6	SK04・26・28出土遺物 (1/4) .....	11
Fig. 7	SD05 (1/50) .....	12
Fig. 8	SD05出土遺物 (1/4) .....	13
Fig. 9	SD05出土遺物 (1/4・1/3・3/4) .....	14
Fig. 10	SD27土層断面 (1/20) .....	15
Fig. 11	SD25・27出土遺物 (1/4) .....	16
Fig. 12	出土遺物 (1/4・1/3・1/2) .....	19
Fig. 13	17次・20次遺構分布図 (1/500) .....	21
Fig. 14	弥生時代遺構分布図 (1/1,000) .....	22

## 写真目次

Ph. 1 調査区全景（南から）	7
Ph. 2 調査区全景（西から）	7
Ph. 3 調査区北壁土層（南西から）	8
Ph. 4 調査区北壁土層（南東から）	8
Ph. 5 調査区西壁土層（北西から）	8
Ph. 6 SK01（南から）	10
Ph. 7 SK03（南から）	10
Ph. 8 SK04（東から）	10
Ph. 9 SK26（西から）	10
Ph. 10 SK04・26・28出土遺物	11
Ph. 11 SD05全景（南から）	11
Ph. 12 SD05土層（南から）	11
Ph. 13 SD05出土遺物	15
Ph. 14 SD27全景（南東から）	16
Ph. 15 SD27土層（東から）	16
Ph. 16 その他の出土遺物	20

## I. はじめに

### 1. 調査に到る経緯

今回の調査は平成9年8月、福岡市早良区田村3-13-5地内において岩室シヅ子氏より店舗兼共同住宅建設の計画で、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に遺跡の有無の照会がなされた事に始まる。受付番号は9-2-247である。

埋蔵文化財課では周知の遺跡内（田村遺跡）である事、平成元年に一度テナント倉庫建設の計画で照会がなされており（63-2-558）、同年3月13日に試掘を実施している。結果、表土下30cmで柱穴群と溝が検出され、遺跡の存在が確認されている。

埋蔵文化財課では申請者と協議を重ねた結果、遺構面に掘削が及ぶ建物部分に関して、埋蔵文化財課が記録保存のため緊急発掘調査を行う事となった。

調査は平成9年10月20日より同年11月14日まで行われた。調査面積は377m<sup>2</sup>である。

尚、調査に際し、申請者をはじめ施工の上村建設には多大な御理解と御協力を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

遺跡調査番号	9748	遺跡略号	TMR-20
調査地地籍	早良区田村3-13-5	分布地図番号	83(野芥)
開発面積	907.06m <sup>2</sup>	調査実施面積	377m <sup>2</sup>
調査期間	97.10.20~97.11.14	事前審査番号	9-2-247

### 2. 調査の組織

調査委託：岩室シヅ子

調査主体：福岡市教育委員会 教育長 町田英俊

調査総括：埋蔵文化財課長 荒巻輝勝（当時） 埋蔵文化財課第1係長 二宮忠司

調査庶務：埋蔵文化財課第1係 浅原千晶

調査担当：埋蔵文化財課第1係 加藤良彦

調査協力：青木秀雄 鬼塚友子 平野義雄 平野ミサオ 高瀬孝二郎 栗木和子 三谷朗子 辻節子  
堀本歳四郎 横尾泰廣

資料整理：平川敬治 山崎賀代子 芦馬恵美子 国武真理子 塩田慧 木村厚子 能美須賀子

## II. 調査区の立地と環境

田村遺跡は福岡市の都心より西へ6km、博多湾岸より南へ5kmの地点、室見川が貫流する早良平野の東部中央の沖積低高地に立地し、遺跡は東西約760・南北約850mの範囲に展開し、標高は15~17mを測る。

遺跡周辺は室見川を中心とする河川の冲積作用によって形成された低平な地形であり、75年以降の宅地開発・学校建設等が始まるまでは集落が点在する以外は一面の水田であった。近年の開発の増加に伴い、四箇・鶴町（免）・原・次郎丸高石・拾六町ツイジ・石丸吉川等これら低地での遺跡の実体が明かになりつつある。

田村遺跡群では20次にわたる調査が実施され、縄文時代早期から江戸時代に至る複合遺跡である事が確認されている。中心となるのは縄文時代後晩期・弥生時代・平安時代後期から室町時代初頭の三時期である。

縄文後晩期は埋甕・溝などがみとめられ、遺物は遺跡の全域で検出される。集落は明かでない。

弥生時代は前期の甕棺墓群・竪穴などが検出され、中期後半には河川内に井堰・杭列などの水利施設が構築され、微高地には集落が形成される。

河川は奈良時代までに埋没し、平安後期から室町初期にかけ、多数の掘立柱建物群が検出され、200棟を越える建物群の有り様と多量の輸入陶磁器の検出から、該期の早良平野内での拠点集落と目され、中世集落研究において重要な遺跡となっている。

以下、各調査の概要を列記する。

第1次調査 4世紀後半の土壙・10世紀代の土壙等

第2次調査 縄文後晩期埋甕・弥生中期の河川・井堰 古代～中世の12～13世紀を中心とする権・掘立柱建物群・竪穴住居・土壙墓等

第3次調査 弥生前期～中期の竪穴住居・土壙・河川・杭列 古墳時代の水田 11世紀代を中心とする掘立柱建物・井戸等

第4次調査 縄文後晩期の土器・石器 11世紀代を中心とする古代～中世の掘立柱建物群・竪穴・井戸等

第5次調査 縄文後晩期の溝・土壙 弥生前期の甕棺墓群 11～14世紀代の掘立柱建物100棟以上・井戸11基・土壙・溝等拠点的集落

第6次調査 縄文後晩期のピット等

第7次調査 5世紀前半の竪穴住居 12世紀後半～13世紀代の溝・土壙等

第8次調査 12世紀後半～13世紀代の区画溝等

第9次調査 縄文晩期の土器・石器 中世の溝・土壙等

第10次調査 中世の溝等

第11次調査 中世の溝等

第12次調査 中世の溝・土壙・井戸等

第13次調査 平安前半～鎌倉時代の掘立柱建物・土壙・溝等

第14次調査 平安時代掘立柱建物等

第15次調査 平安時代掘立柱建物等

第16次調査 旧河川等

第17次調査 弥生中期前半～後半の竪穴住居・溝等



Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

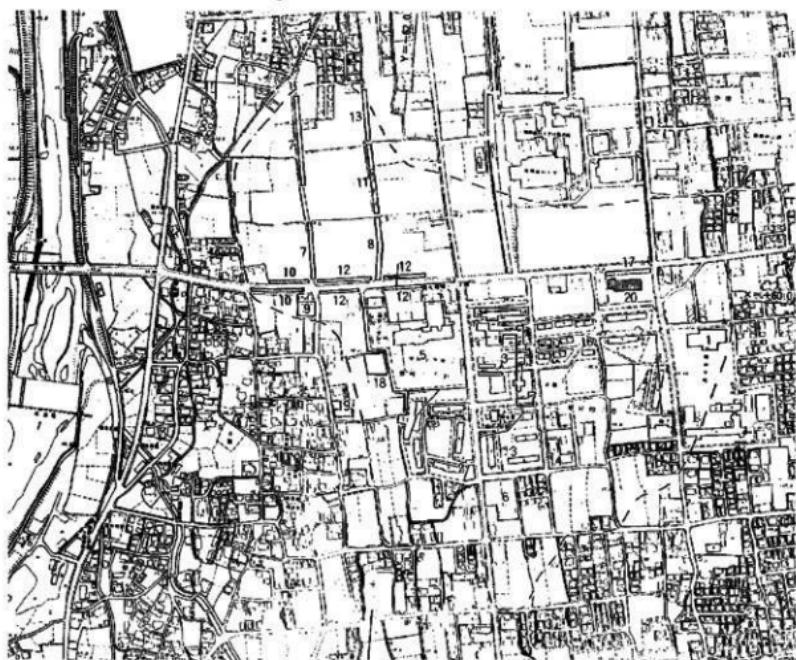


Fig. 2 調査区位置図 (1/8,000)

第18次調査 古代～中世の掘立柱建物等

第19次調査 中世の溝等

第20次調査 繩文時代の旧河川 弥生前期末～中期後半の溝・土壌等

Tab. 1 発掘調査一覧

調査 次数	調査番号	調査原因	調査面積	調査期間	調査報告書
1	7803	学校建設	3,000m <sup>2</sup>	1978. 10. 11～1978. 12. 2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集 1981
2	8034	団地建設	2,650m <sup>2</sup>	1980. 12. 5～1981. 4. 14	福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集 1982
	8035				福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集 1984
3	8144	団地建設	12,820m <sup>2</sup>	1981. 4. 22～1982. 5. 15	福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集 1987
	8145				
	8146				
4	8233	団地建設	8,500m <sup>2</sup>	1983. 1. 20～1983. 6. 15	福岡市埋蔵文化財調査報告書第216集 1990
5	8404	学校建設	17,000m <sup>2</sup>	1984. 7. 1～1985. 7. 6	福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集 1988
6	8429	店舗建設	800m <sup>2</sup>	1984. 8. 1～1984. 9. 10	整理中
7	8447	道路建設	1,800m <sup>2</sup>	1984. 12. 1～1984. 12. 29	福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集 1987
8	8847	道路建設	632m <sup>2</sup>	1988. 12. 2～1989. 3. 11	福岡市埋蔵文化財調査報告書第384集 1994
9	8934	公民館建設	540m <sup>2</sup>	1989. 7. 5～1989. 8. 16	福岡市埋蔵文化財調査報告書第302集 1992
10	8970	道路建設	600m <sup>2</sup>	1990. 2. 8～1990. 3. 31	福岡市埋蔵文化財調査報告書第524集 1997
11	9059	道路建設	656m <sup>2</sup>	1991. 1. 16～1991. 3. 9	福岡市埋蔵文化財調査報告書第384集 1994
12	9242	道路建設	512m <sup>2</sup>	1992. 10. 26～1992. 12. 14	福岡市埋蔵文化財調査報告書第385集 1994
13	9247	道路建設	581m <sup>2</sup>	1992. 12. 1～1993. 1. 30	福岡市埋蔵文化財調査報告書第384集 1994
14	9248	団地建設	1,500m <sup>2</sup>	1992. 11. 30～1993. 1. 31	福岡市埋蔵文化財調査報告書第423集 1995
15	9320	団地建設	740m <sup>2</sup>	1993. 6. 17～1993. 7. 31	福岡市埋蔵文化財調査報告書第423集 1995
16	9321	施設建設	80m <sup>2</sup>	1993. 6. 28～1993. 6. 29	福岡市埋蔵文化財年報 Vol. 8 1995
17	9358	道路建設	372m <sup>2</sup>	1994. 1. 15～1994. 2. 5	福岡市埋蔵文化財調査報告書第524集 1997
18	9624	住宅建設	500m <sup>2</sup>	1996. 8. 2～1996. 8. 7	福岡市埋蔵文化財調査報告書第612集 1999
19	9728	住宅建設	315m <sup>2</sup>	1997. 7. 24～1997. 8. 8	福岡市文化財年報 Vol. 12 1999
20	9748	住宅建設	377m <sup>2</sup>	1997. 10. 20～1997. 11. 14	本報告

### III. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

本調査区は田村遺跡群の東縁辺に近く、遺構検出面で標高14.5mを測る。現況は2面の水田である。層位はFig. 4で示すように、上層から耕作土・床土・灰褐色混砂礫土・淡黄緑～淡灰褐色のシルト・黄灰色～淡灰褐色の粗砂礫層で、全て水成堆積層である。

遺構検出はほぼ床土直下の淡黄緑灰色のシルト層上で行った。このシルト層下の砂礫層は東から西へと70cm程ゆるい傾斜で下がり、上位のシルト質層もこれに対応しており、本来の地形は東側に高い地形であった様である。この西側の低位のBライン・C～Dライン間に南北方向にそれぞれ幅6.3mの旧河川が調査区内を貫流しており、Bラインの河川がこれを切っている（15～16層）。さらにこの下に別の河川が重なっている（17～20層）。8層中より縄文粗製土器の小片を3片検出しておらず、遺構内の混入土器から類推して後期と思われる。

遺構はこれらシルト質層の上面から掘削されているが、水田開削時の削平が著しく、ほとんどの遺構は深さ20cmに満たない。覆土は暗褐色混砂礫土である。

検出された遺構は弥生時代前期末から中期後半の土壙5基・溝2条・柱穴で他は自然の落ち・風倒木痕等である。遺構は西側に集中する。時代は若干の縄文後晚期遺物以外は弥生時代のみで、中世は全く検出されず、集落からははずれており、中世の段階で既に水田化していた可能性がある。

93年に実施された北隣地の17次調査においても同様で、ここでは中期前半～中頃の堅穴住居3軒・南北方向の中頃後半の溝1条・土壙2基が検出されている。中世の遺構は全く検出されていない。住居の残存も5cm前後と極めて浅い。溝SD01は本調査区のSD05とつながり、ゆるいS字を描いて南南東方向に延びている。遺構はこの溝の西側に分布している。本調査区でも同じ傾向にあり、SD05西側の柱穴集中部分は径5m前後の円形住居址の可能性がある。

出土した遺物はコンテナ4箱分である。

#### 2. 弥生時代の調査

##### 1) 土壙 土壙はSD01の東西に近接して検出され、5基検出した。

SK01 (Fig. 5 Ph. 6) G 3 グリッド付近に位置し、長軸をほぼ南北方向にとり、長軸2.15m幅1.13m深さ16cmの深い土壙で平面は不整形である。床面は平坦で、径15cm程の円礫を多量に含む地山層を10cm程掘りくぼめている。覆土は暗褐色混砂礫質土で、下層で地山シルトを多く混じる。

出土遺物は弥生土器の甕の小片と縄文時代早・前期の黒耀石製の石鏃 (Fig. 12) を検出している。

SK03 (Fig. 5 Ph. 7) E 4 グリッドに位置する。径1.18×1.08mの円形プランで、深さ30cm程の底面の中央をさらに径88×68cm深さ15cm程の円形に掘り下げる二重土壙となっている。地山は粘質～シルト質層で、下層の砂礫層にまで掘削は至っていない。覆土は灰色粘質土で、暗褐色土・地山土ブロックを1/3～2/3含む客土で、人為的に埋められている。

出土遺物は弥生上器の甕小片のみである。

SK04 (Fig. 5 Ph. 8) D 4 グリッドのSD05の東脇に位置し、SD05に切られるSD27の直交方向に方位をとっている。長軸1.3m幅0.52m深さ16cmの深い不整辺円形を呈する土壙である。床面は樹根の搅乱によるものと思われる小さな凹凸におおわれる。覆土は暗灰褐色粘質土、下層に緑灰色シ

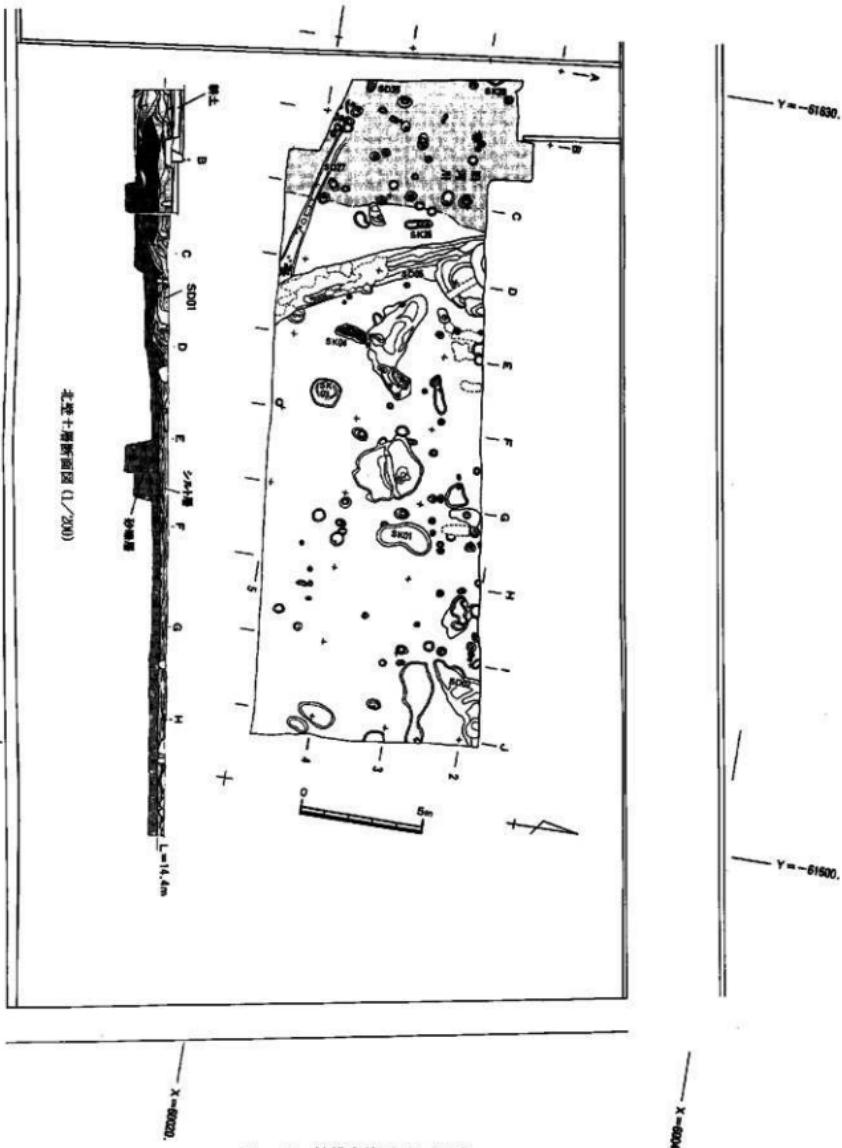


Fig. 3 遺構全体図 (1/200)



Ph. 1 調査区全景（南から）



Ph. 2 調査区全景（西から）

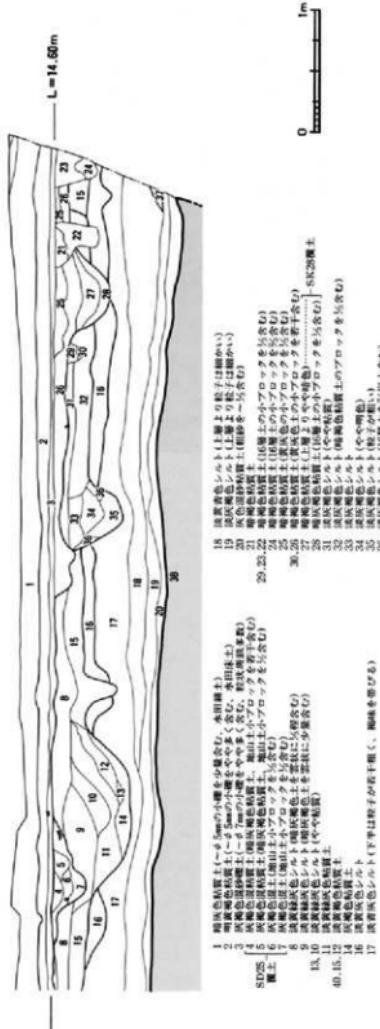


Fig. 4 西壁土層断面 (1/40)



Ph. 3 調査区北壁土層 (南西から)



Ph. 4 調査区北壁土層 (南東から)



Ph. 5 調査区西壁土層 (北西から)

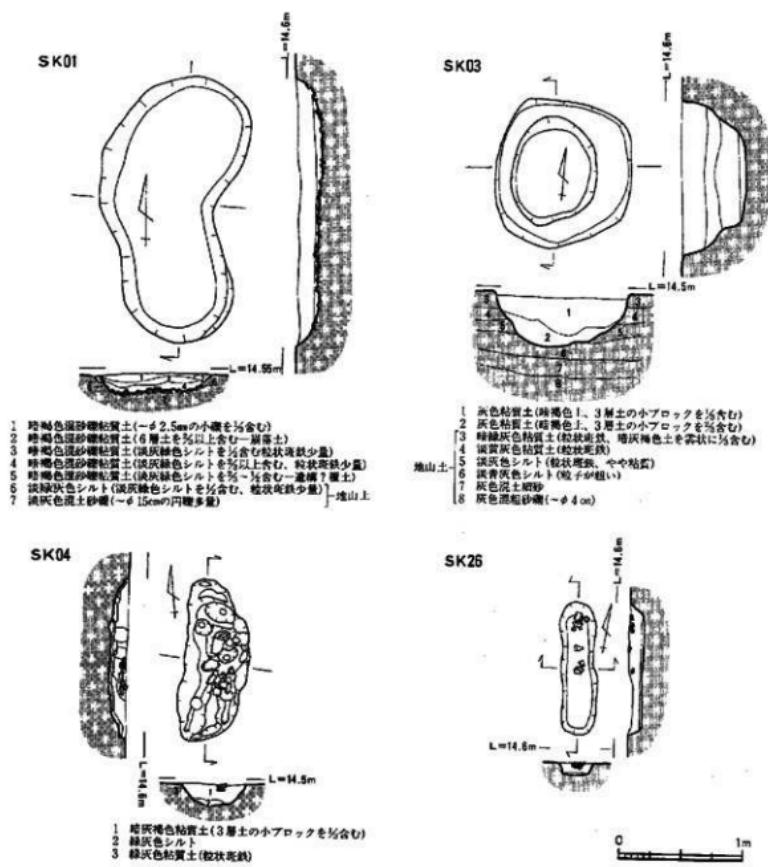


Fig. 5 SK01・03・04・26 (1/40)

ルトが堆積する。遺物は地山土の小ブロックを1/3混じる埋土の上層中から検出した。

出土遺物 (Fig. 6 Ph. 10) 検出した遺物は弥生土器の壺の小片と蓋である。

1は壺の蓋で、全周の3/4が残存する。口径22.4cm高6.6cmを測る。径6.6cmの上げ底状の壺の底部に似たつまみ部から体部が外反気味に直線的に延び口唇に浅い沈線を一条施す。外面はタテハケを施し、口縁下はヨコハケを施した後、2条の沈線を施す。内面は口縁部にヨコハケ、体部にヨコ板ナデを施し、底面近くにしづり痕が残る。色調は黄橙色で、胎土に石英粒・金雲母を多く施す。中期前葉。

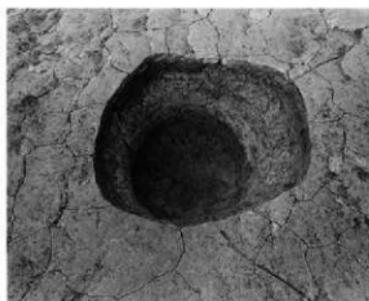
SK26 (Fig. 5 Ph. 9) A 4のSD05西側に位置し、長軸1.08m幅27cm深さ9cmの極めて浅い溝状の土壤で、A~C・2~4グリッドの円形に巡りそうな柱穴列の円弧上に位置しており、17次調査の成果等を考慮すると円形窓穴住居の壁溝の残存の可能性も考えられる。覆土は暗灰褐色泥質粘土で、遺物は土器小片が上部に散布している。

出土遺物 (Fig. 6 Ph. 10) 検出した遺物は弥生土器の壺小片多数と黒耀石の剥片である。

2は断面三角形の口縁を有する甕の口縁部で、口径22cmを測る。口唇には小さな刻目を施し、外面はタテハケ後ヨコにナデる。上面にもヨコハケを施し、内面には指頭圧痕が残りヨコにナデられる。胎土は2mm前後の石英粒を含み浅黄褐色を呈する。3は甕の底部で、径9cmを測る。直線的にすばまる胸部から底部端が強く外方へ張り出し、外底は極端な上げ底となる。外面は指頭圧痕後タテハケを施す。胎土は2~3mmの大粒の石英粒を多く含み、色調は外面は明褐色、内面は炭素を吸着して黒色を呈する。時期は前期末である。



Ph. 6 SK01 (南から)



Ph. 7 SK03 (南から)



Ph. 8 SK04 (東から)

SK28 (Fig. 4) 調査区北西端のA 2 グリッド西壁に位置する。大半が調査区外へ延びるが、土層観察では26層下面の深さ6cm程の浅い遺構の床面からさらによがる断面円形の土壌で、幅63cm検出長で15cmの方形プランを呈する。竪穴住居の屋内土壌の可能性も考えられる。調査時、排土処理は場内となつたため、表土剥の重機を北西のトラクター用の通路から搬入し、表土を西から東へ剥ぎながら、東端に排土でスロープを作つて重機を搬出する段取りとした。このため表土剥をこの位置から開始し、薄く包含層が残存していたのは確認したが、西へ傾斜する包含層と判断して下面の遺構面まで下げている。土層断面では10cm程の壁の立ち上がりが確認でき、広めの土壤か竪穴住居の誤認であったと思われる。

出土遺物 (Fig. 6) 4は甕の底部で径7cmと小さく、外方への張り出しへないが、底は2.3cmと厚く、外底は上げ底となる。外面にタテハケを施し、内底には炭化物が付着する。胎土は細かな石英粒を多く含む。中期前葉。



Ph. 9 SK26 (西から)

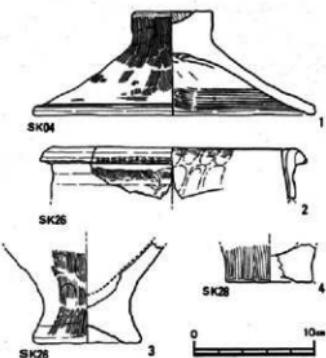


Fig. 6 SK04・26・28 出土遺物 (1/4)

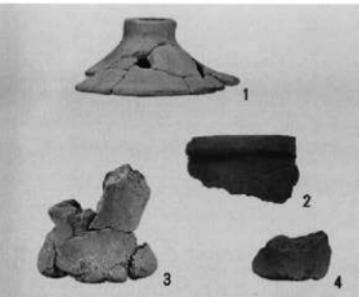
2) 溝 溝は西半部でN-22°-Wに方位をとる南北方向のSD05と、これに切られるN-73°-Wの東西方向に方位をとる一連の溝SD25・27の3条を検出した。

SD05 (Fig. 7 Ph. 11・12) C 2グリッドからD 5グリッドのN-22°-E方向に検出された溝で調査区を南北方向に縦断している。幅は1.2m程で広いものではない。深さは35cm程と浅く、断面は逆台形に近い。縄文時代の旧河川と重複している。土層観察と底面の切り合いからすると、当初幅1.2mで掘削していた溝が、暗褐色粘質土で一度埋没し、これを再度80cm程の幅で掘り直しており、遺物はこの二度目の溝の覆土中で多量に検出される。土器と円礫が多く、土器はほとんどが細片で完形品・大きな破片はない。今回検出した遺物コンテナ4箱分の9割近くはこの溝から検出されている。覆土は黒褐色混砂疊粘質土で、遺物は上層に多く、全面に散布し、偏りはない。溝の北端と南側の破線は遺物検出時に床面を掘り過ぎたためである。

出土遺物 (Fig. 8・9 Ph. 13) 5は中期初の広口の壺の口縁で、口径20cm程で、断面三角形の口縁から頸部へと大きく外反し、肩部は口径より大きいと思われる。頸部外面はタテ板ナデ、口縁部はヨコ板ナデ。口唇内側は板ナデ工具の木口によるヨコナデくぼみ、以下はナナメ板ナデである。6



Ph. 11 SD05 全景 (南から)



Ph. 10 SK04・26・28 出土遺物



Ph. 12 SD05 土層 (南から)

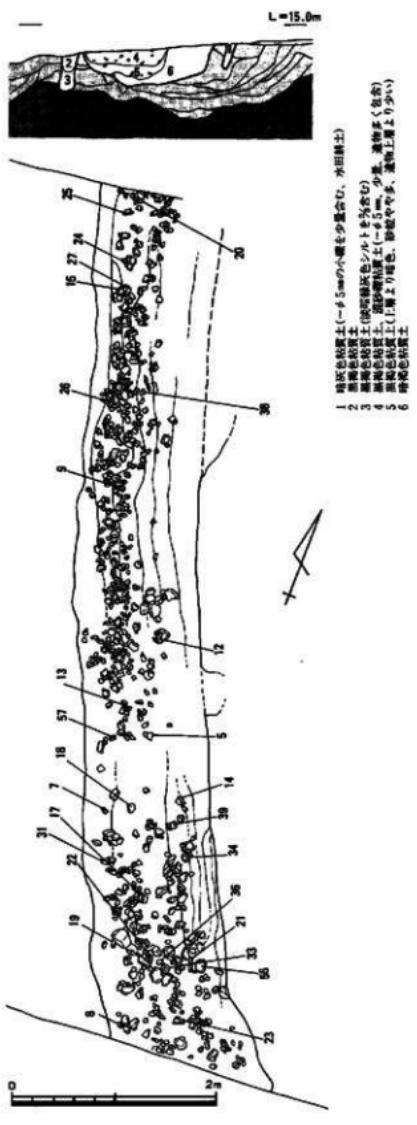


Fig. 7 SD05 (1/50)

も中期初の壺の口縁部で口径18.2cmを測る。口縁は短い逆し字形で上面は若干内傾し、口唇内面は同様に木口でヨコ板ナデでくぼませる。頸部は5ほどではないがゆるく外反し、口径より大きな肩部へと延びている。内外面はタテハケ後ヨコにナデ消す。調整は粗い。7は小形の鋤先口縁壺で径16.6cmを測る。径の割りに口唇が大きく内側の張り出しが大きい。上面は若干外傾し、外面に刻目を施す。調整は内外ともにヨコナデを施す。胎土には細かな石英粒を多量に含み、色調は黄橙色を呈する。8は同じく鋤先口縁の壺で口径22cmを測る。口唇は面取りされ内側の張り出しは小さい。外傾の度合いは小さい。外面には粗いヨコケンマを施す。胎土は細かな石英粒・金雲母を多く含む。色調は外面は暗灰黄色、内面にはぶい黄色を呈する。9はやや大形の鋤先口縁壺で口径27.8cmを測る。口縁上面はほぼ水平で、内面の張り出しは小さく口唇は凹線気味に仕上げる。器面調整は内外ともにヨコナデである。色調は黄橙から橙色を呈する。10は小形の壺の口縁で短い逆し字状を呈し口唇に細かな刻目を施す。調整はヨコナデ後ゆるいケンマを施す。色調は浅黄橙を呈する。11~34は甕である。11は口径29cmの逆L字状を呈する口縁で、若干内傾し内側は稜をなす。口唇全面に刻目を施し、胴は若干張る。口縁上面と外面はヨコ板ナデ後ヨコナデ。内面はヨコナデを施す。色調はぶい黄橙から灰黄褐色を呈する。12は亀ノ甲式系の甕で口径28cmを測る。口縁は三角断面で口唇は磨滅のため刻日の有無は不明。胴が強く張り、口縁下に小さな

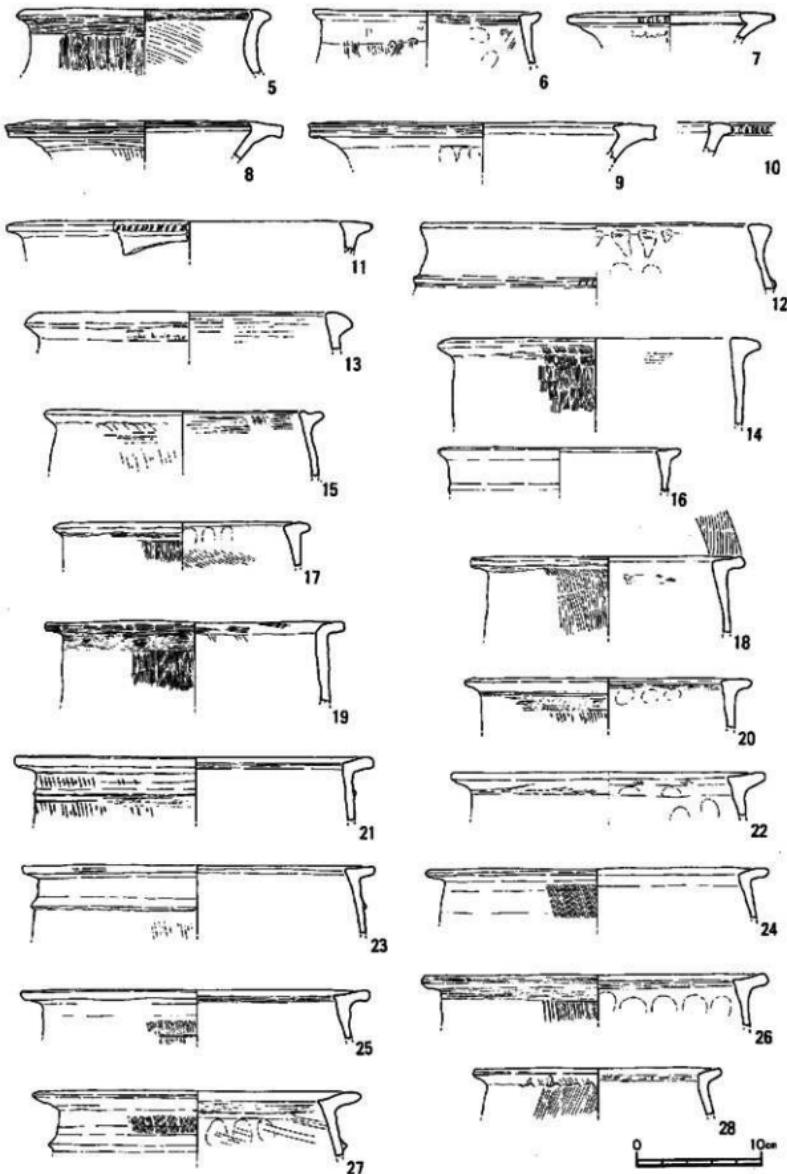


Fig. 8 SD05 出土遺物 (1/4)

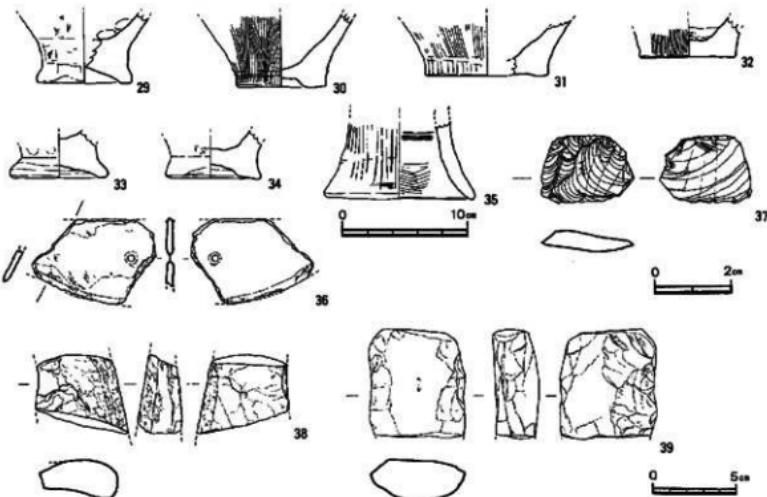
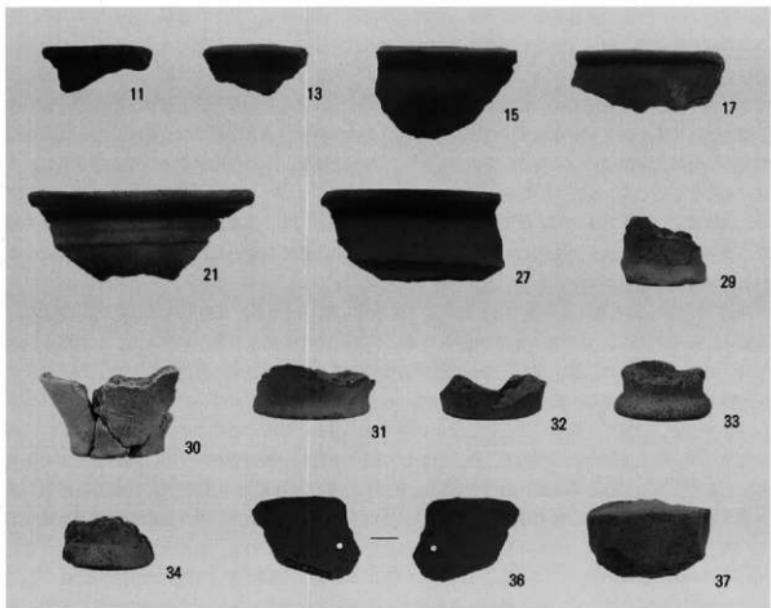


Fig. 9 SD05 出土遺物 (1/4 • 1/3 • 3/4)

三角突帯を一条施し、細い刻目を施している。胎土は2~4mmの大粒の石英粒を多く、茶色粒子を若干含む。外面の調整は不明。内面は指圧痕後ヨコ板ナデを施す。13は大きな三角口縁をなす甕で、幅2cm程の粘土帯を外面に張っている。口径25.8cmを測る。外面には板ナデ工具の木口を縱位に施した板ナデを施し、内面はヨコ板ナデを施す。胎土は2~3mm大の大粒の石英粒を多く含み、色調は灰黄~浅黄色を呈する。14も三角口縁の甕で口径26.2cmを測る。口唇は横に延びて逆L字形に近付く。上面は若干外傾し、外面にはタテハケ、内面にはヨコナデを施す。胴は若干張る。胎土は2~3mmの大粒の石英粒を多く含み、金雲母を若干含む。色調はにぶい黄橙から浅黄橙を呈する。15は三角形の口縁上面が水平で胴がやや強く張る。口径22.4cmを測る。外面はヨコナデ、口縁上面はヨコハケ後ヨコナデ、内面は上位に粗いヨコハケ調整後ヨコナデを施す。胎土は細かな石英粒を含み淡黄~灰白色を呈する。16は逆L字状口縁の鉢で、口縁が厚く三角口縁の名残りを残す。口径19.4cmを測る。口縁は若干内傾し内側は稜をなす。胴は張らずに直線的にすばまり、口縁下に低い三角突帯を1条施す。外面は調整具の木口のヨコナデ後ヨコナデ、内面はヨコナデを施す。色調は明黄褐色を呈する。17は同じく太く短い逆L字状の口縁で、口径20.6cmを測る。胴がやや張り、外面はタテハケ内面は口縁部に指頭圧以下に粗いナナメハケを施しヨコナデを施す。胎土は2~3mmの大粒の石英粒を多く含み、色調はにぶい黄橙~浅黄橙を呈する。18は逆L字口縁を呈し口唇は面取り状に仕上げる。上面は水平に近く若干内傾する。内側は稜をなす。胴はゆるく張り、外面にやや粗いタテハケ、上面にナナメハケを施す。内面はヨコ板ナデ後ヨコナデを施す。色調は浅黄橙~橙色を呈する。19は口縁が逆L字状をなすが、内面の稜はゆるくなる。口径24.2cm。口唇はナナメ板ナデで面取りを施し浅い沈線を一条施す。胴部は若干張り、外面はタテハケ後口縁下をヨコ板・ユビナデを施す。内面は口縁から上位にナナメハケを施しヨコナデを施す。胎土は2~3mmの大粒の石英粒を含み、色調は淡黄~灰黄色を呈する。20は口縁上面がほぼ水平になる逆L字状口縁で口唇は丸く仕上げる。口径23cmを測る。外面はタ



Ph. 13 SD05 出土遺物

テハケ後口縁下をヨコ板・ユビナデ、浅い沈線を一条施す。上面はヨコハケ、内面は口縁部で指頭圧痕後調整具木口のヨコ板ナデを施しユビナデを施す。胎土は細かな石英粒を含み、色調は橙～灰色を呈する。21は口縁がやや内傾する逆L字口縁の壺で、口唇は面取りがなされる。口径28cmを測る。外面は粗いタテハケを施し、口縁部はヨコナデ。口縁下に低平な三角突帯を一条施す。内面は口縁直下を凹線状にナデくぼませて鋭い稜線となっている。胎土は細かな石英粒が多く含み色調はにぶい黄橙～灰色を呈する。22は若干厚めの逆L字口縁で、口径25.2cmを測る。口唇は丸みを帯びる。口縁は若干内傾し、内側が稜をなす。外面は磨滅のため調整不明。内面は指頭圧痕後ナナメハケ、口唇下を調整具の木口でナデくぼませる。色調は灰黄色を呈する。23も同様の逆L字形であるがこれより口縁は薄く、内側の稜線部が張り出す傾向にある。口径は27.6cmを測る。上面と口唇はヨコ板ナデで面取りがなされる。外面は口縁下にヨコナデを施し低平な三角突帯を一条施す。他の調整は器壁が荒れ不明である。胎土は細かな石英粒を含み、色調は明褐～橙色を呈する。24は口縁がやや強く内傾し、肩が大きく張る。上面はやや湾曲し口唇は丸く仕上げる。口径は27.2cmを測る。外面は細かなタテハケを施し、口縁部はヨコにナデる。内面は器壁が荒れ調整不明である。胎土は細かな石英粒と金雲母を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。25は口縁がやや内傾する逆L字状口縁で、口径27.8cmを測り、肩曲部が肥厚する。口唇は丸く納め、上面にはヨコハケを施す。内側はやや張り出し気味の稜線となり、直下をハケ調整具の木口によるヨコ板ナデで面取り状に調整する。外面にはタテハケを施し口縁部はヨコにナデる。口縁下に浅い沈線を一条施す。色調は灰色～浅黄橙色を呈する。26も同様に口縁がやや内傾するが上面は若干内湾する。口径27.4cmを測る。内側は若干張り出し稜をなしている。外

面は粗いタテハケ後口縁部をヨコにナデ、内側には指頭圧痕が残る。胎土は細かな石英粒を含み、色調は外面が灰白色、内面は橙色を呈する。27は24の内傾と胴張りをさらに強くしたもので、口径25.8 cmを測る。口唇は丸く納め上面は若干外湾気味になる。外面はタテハケ後ヨコ板・ユビナデを施し口縁下にやや幅広の三角突帯を一条施す。内面は若干張り出し気味に稜をなし、口縁下に指頭圧痕を施し粗いナメ板・ヨコナデを施す。口縁直下にはハケ調整具木口のヨコ板ナデを施す。胎土は細かな石英粒を含み、色調はにぶい黄橙～橙色を呈する。28も同様で、やや小形の甕で口径20cmを測る。口唇は面取りを施し浅い沈線を一条施す。上面は若干外湾しヨコハケを施す。内側は稜をなす。直下にハケ調整具木口のヨコナデでくぼませ稜の張り出しを強めている。外面にはやや傾いたタテハケを施し、カキ寄せられた粘土の小塊が一部口縁下に残っている。胎土は細かな石英粒を含み、色調はにぶい黄橙～浅黄橙色を呈する。

Fig. 9の29～34は甕の底部である。29は小さく極端に厚い底部で、底盤が外方にややふんばる。外底は1.8cm程の高い上げ底で、径は7.4cmを測る。厚みは3.5cmを測る。外面にはタテハケが残るが、指頭圧の凹凸が著しい。胎土は2～3mm前後の石英粒を多く含み、色調は外面が灰黄色、内面は炭素を吸着して黒色を呈する。30は径がやや大きくなり、くびれは無くなり厚みは薄い底部である。外底はややきつい上げ底で、幅広の高台状をなす。径7cmを測る。外面には粗めのタテハケを施す。内面は調整不明。胎土は細かな石英粒を含み、色調は外面は浅黄橙～黄橙色を呈する。内面は炭素を吸着して黒色を呈する。31はさらに広い底部で径9.6cmを測る。平底の底部で、外底の脇と底面の粘土の接合部が輪状に浅くくぼむ。外面は底部脇に粗い、その上により細目のタテハケを施す。内面は調整不明。胎土は2～4mm前後の大粒の石英粒を多量に含み、色調は外面は灰白色内面は暗灰色を呈する。32は小形の甕の底部で径7.4cmを測る。31と同じ成形で、外底が平底で粘土接合部が輪状に浅くくぼむ。内底面も平坦になっている。器壁は薄めである。外面には細かなタテハケ調整を施し、内面には指頭圧痕が残る。色調は外面は浅黄橙色で内面は炭素を吸着して黒色を呈する。33・34は径が小さく蓋の可能性がある。33は29同様、底部と胴部の境が強くくびれて端部が強くふんぱり、外底は強い上げ底になる。径7.7cmを測る。厚みは3.2cmと極めて厚い。内外ともに器壁があれ、調整は不明。胎土は1～2mm前後の石英粒を多量に含む。色調は淡黄～灰黄色を呈する。34は底径7.3cm。胴部との境がややくびれ端部が少々ふんぱる。外底はやや強い上げ底で幅広の高台状となり、内底も盛り上がる。外面にはタテハケが施され、内面は器壁があれ調整不明。胎土は1～4.5mm前後の石英小砾まで含み粗い。色調は浅黄～灰黄色を呈する。35は器台の据部で、径12cmを測る。外面には粗いタテハケを施し、端部付近をヨコにナデる。内面は同様の粗いヨコハケを施す。胎土は2～4mmの大粒の石英粒を多量に含み、色調はにぶい黄橙～橙色を呈する。

36～39は出土した石器である。石器も土器同様、小さく破碎されており、完形、もしくはそれに近いものはない。石材として徹底利用した様である。

36は内湾刃の石包丁の小片で、左右両側が打ち欠かれている。幅5cm厚さ4mmの薄い粘板岩製で、表面は研磨がなされている。長さ17cm前後の狭長な形であったと思われる。37は黒耀石の使用痕を有する剥片で、幅2.3cm程の不定形剥片の、主剥離面の左側縁を使用している。38・39は今山産の玄武岩製太形蛤刃石斧の断片で、折損品を石器の石核として再利用したと思われ、細かく打ち割られている。38は頭部のすぼまる、偏平な石斧であった様で、幅6～7cm厚さ3cm程に復原される。上下と裏面を打ち欠いており、残核となって最終的に上面左の平坦な剥離面を砥石として転用し、廃棄されている。39は大型の石斧の折損品を長さ6.5幅5.5厚さ2.5cmの方形に四周に敲打を加えて外形を整え、表面の平坦部を同じく砥石として使用している。重量は166.4gを測る。

弥生前期末から若干中期後葉の遺物も含むが、主体は中期初頭～前葉が占める。

SD25・27 (Fig. 10 Ph. 14・15) SD25・27はSD05の西側、A4～D5グリッドに位置し直線的に延び、SD25・27間は1.8m程空く。SD05と竪穴住居の可能性のある柱列に切られる。方位をN-73°-Wにとり北西に延びるが、延長線上の17次調査区の西部では検出されていない。幅70cm深さ20cmと浅く、断面は舟底形を呈する。土層断面を観察すると、最下層に淡灰褐色のシルト層の堆積後、幅40cm程に狭めて溝の改削が行われている。遺物はこの二度目の溝の上位覆土中から検出され、SD05付近に集中する。

出土遺物 (Fig. 11) 40はSD25から出土した逆L字口縁の壺で口径22.4cmを測る。上面は水平で口唇は丸く收める。内側は若干張る。上面はヨコナデ口縁外面はハケ調整具木口でヨコナデを施す。胎土は細かな石英粒を含み、色調は明黄褐～橙色を呈する。

41～45はSD27の出土品である。41は小形の鉢で、口縁を打ち欠いているが、やや内傾する短い逆L字口縁を持つと思われる。径8.6cm程である。内側は稜をなす。外面の調整はヨコナデ。胎土は細かな石英粒を含み、色調はにぶい褐色を呈する。42は壺か高環の口縁と思われ、頸部が直線的に外反して口唇が短くコ字状に水平に折れ曲がる。口唇は面取り風で浅い沈線が一条見受けられる。外面に

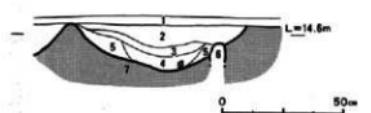
ヨコナデを施す。色調は淡黄色を呈する。43は



Ph. 14 SD27 全景（南東から）



Ph. 15 SD27 土層（東から）



- 1 明黄褐色粘質土(底土)
- 2 淡灰褐色粘質土(暗灰褐色土の小ブロックを含む)、上面に輕度鉄化(鉄化)範囲の鐵状斑块有り
- 3 淡灰褐色土(小ブロックを含む)
- 4 淡灰褐色土(小ブロックを含む)
- 5 淡灰褐色シルト質土(地山土を5%以上含む)範囲の鐵状斑块有り
- 6 暗灰褐色シルト質土(暗灰褐色土を含む)範囲の鐵状斑块有り
- 7 淡暗褐色シルト(暗灰褐色土を含む)範囲の鐵状斑块有り

Fig. 10 SD27 土層断面 (1/20)

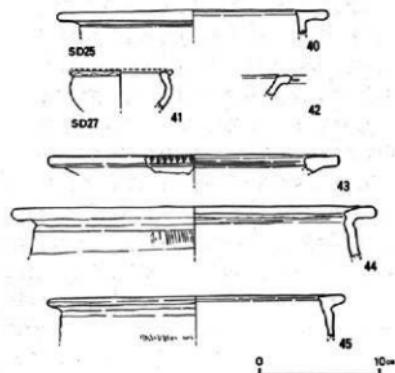


Fig. 11 SD25・27 出土遺物 (1/4)

肥厚した平担口縁の壺で、口径24cmを測る。口唇は面取りし、ハケ調整具の木口で全面に、上側に深く刻目を施す。内側は段をなし、ヨコ板ナデを施す。胎土は細かな石英粒を含み、色調は橙～にぶい黄橙色を呈する。44はやや大振りの壺で、口径30.2cmを測る。逆L字状の口縁で若干内傾する。上面はやや外湾する。口唇は丸く収め、内側が稜をなし、稜直下をハケ調整具の木口でヨコにナデくぼませ、稜を強調している。胴はやや張り、外面にタテハケ下部はヨコナデで突帯がある様で、口縁部はヨコナデを施す。胎土は細かな石英粒を含み、色調は橙～浅黄橙色を呈する。45は肥厚する逆L字状の口縁で、三角断面口縁との中间的な様相を示している。口唇は丸く収める。上面はほぼ水平でヨコハケ後ヨコナデを施す。外面はタテハケ後口縁部をヨコナデ、内面は口縁が若干張りヨコナデを施す。

全体的に中期初頭から前葉を示している。

### 3. その他の出土遺物

Fig. 12の46～52はSK01とSD05の弥生遺構に混入して検出された縄文時代遺物である。

46は貝殻条痕を施す粗製深鉢の小片で、外面は下から上へのタテ条痕調整、内面は左から右への粗いヨコ貝殻条痕を施す。器壁はやや薄く、色調は外面が淡黄色、内面は褐灰色を呈する。47は頸部から口縁へゆるく外反する粗製深鉢の小片で、外面はナデ、内面は幅広の深いヨコハケ状の条痕を施す。胎土は細かな砂粒を含み、色調は暗褐色を呈する。48は横方向のやや粗いヘラ描沈線を施し、胎土は極めて細かな砂粒を含み、器壁は薄い。曾畠式土器の小片と思われる。色調は黒褐色を呈する。49は外面に条縁状の細かなヨコ方向の条痕文を施す。器壁は厚さ6mmと薄く、胎土に石英粒を多く含む。轟式系の条痕文土器か。色調は灰黄色を呈する。50は晩期前半の精製浅鉢の口縁部小片で、口縁内外に一条ずつ沈線を施す。胎土は緻密で色調は灰白色を呈する。51は円盤貼付の深鉢の底部で、径8.2cmを測る。外面には指頭圧痕が多く残り、くびれ部を凹線状にナデくぼませている。外底は平坦。胎土は2～5mmの大粒の石英粒を多く含む。色調は灰黄色を呈する。52は黒耀石製の石鎌で、長さ28mm厚さ4.5mmを測る。両面に細かな桶状剥離を施す。全体に風化が進んでおり、早・前期に属すると思われる。重量は1.57gを測る。以上、前期～晩期の資料が検出される。

53～62は弥生上器である。大部分はSD05の出土品である。

53は小型の壺の頸部で、径6.8cm。頸部にはタテ方向のケンマを施し、その際上下端を強く押圧して列点状の浅い段をつくり出している。胎土は緻密で、色調は黒色を呈する。前期後葉か。54は三角口縁の壺でゆるく外湾する。口径25.8cmを測る。粘土帶の接合痕が外面に明瞭に残り、つくりは粗雑である。内外をハケ調整具の木口でヨコにナデしている。外面にはタテ板ナデを施す。胎土に1～2mmの石英粒を多く含み、色調は灰黄～明褐色を呈する。55は如意形口縁を呈する壺の小片で、低い三角突帯を施し浅い刻目を施す。内面にはタテ指圧痕が残り、内外をヨコにナデる。胎土は1～2mmの石英粒を多く含み、色調は浅黄緑を呈する。56は径5.8cmの小形品の底部で、くびれではなく、丸底化の兆しが見える。底は厚く2cm以上と思われる。57と61は蓋と思われる。径は小さく、それぞれ6.5cmを測り、中央が強くくびれ、端部が張り出す。上面はそれぞれくぼむ。57は外面に指頭圧痕が多く残り、61はタテ板ナデ後ユビナデを施す。底部は極端に厚く、端部に沈線を施す。それぞれ3cm・4.2cmを測る。58はB4の検出面で出土した高杯の脚で、径20cmを測る。端部は面取りされ、内面は浅い凹線状にくぼむ。ヨコハケ後ヨコナデを施す。胎土は2～3mmの石英粒を多く含み、色調は淡黄色を呈する。59は同じく検出面出土の器台の据部で、径10cmを測る。外面は指頭圧後タテハケ、端部はヨ

コにナデる。内面には縦位の指頭圧痕が多く残る。胎土は細かな砂粒を含み、金雲母を含む。色調は淡黄～橙色を呈する。60は口縁の肥厚する鉢と思われ、径18cmを測る。上面は平坦でヨコ板ナデ後ヨコナデを施す。厚い口縁下にはタテ板ナデを施す。胎土は緻密で、色調は灰白～浅黄橙色を呈する。62はレンズ底の壺底部の小片でSD05出土。器壁は磨滅し調整不明である。胎土は2～3mmの大粒の石英粒を含み、色調は灰白色を呈する。以上、前期後葉～後期前葉までの資料が検出されている。

63～65は古墳時代前期の土師器である。

63は壺の肩部小片で、外面の上下に横位のハケ調整具による条線間に同調整具による波状文を施す。内面はケズリを施す。胎土は細かな石英粒を含み、器壁はやや厚めである。色調は外面は浅黄色、内面は黒色を呈する。SD05出土。64・65は外面に横位の平行叩痕を有する壺の小片で、内面はケズリを施す。胎土はともに2～3mmの大粒の石英粒を含み、64は黒色、65は灰白色を呈する。65はSD05出土である。

66はSD05出土の弥生時代中期の丹塗磨研壺の底部を打ち欠いて作った土器片円盤の半折品で、片面に丹が残る。

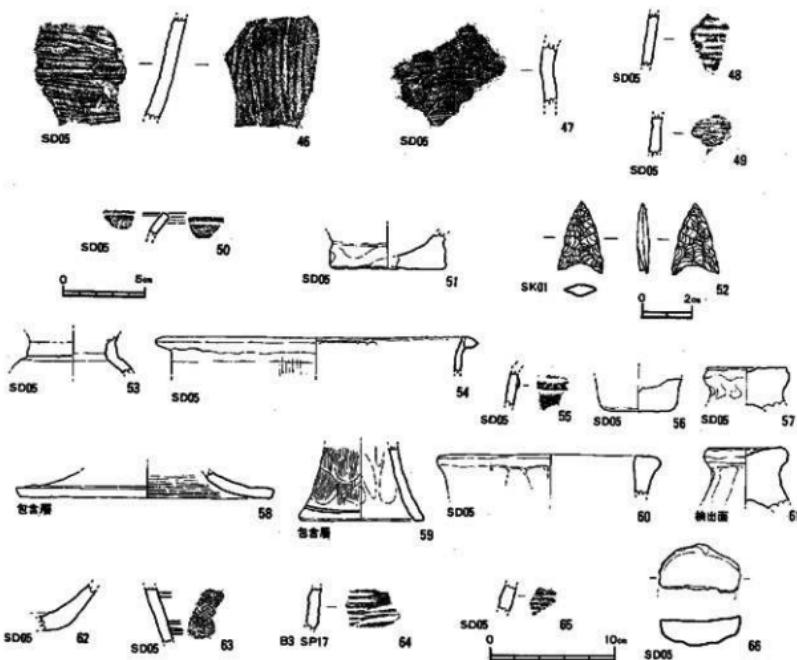


Fig. 12 出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

#### 4. 小結

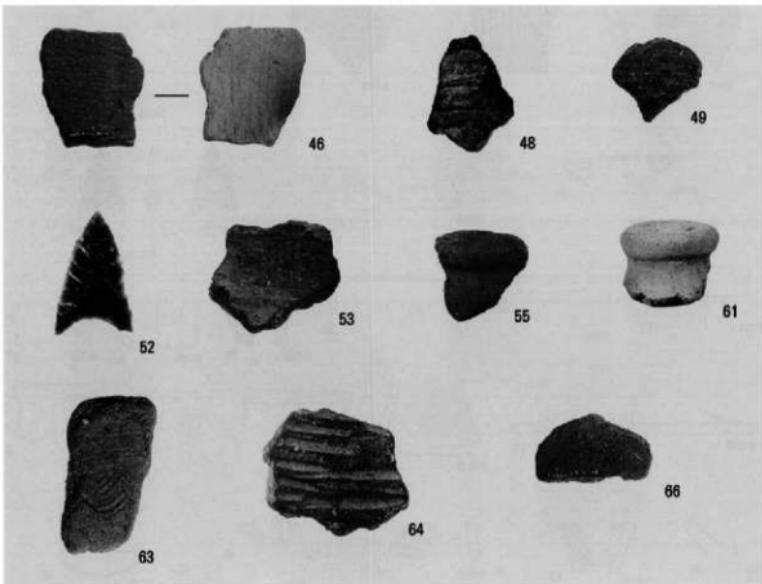
今回の調査では、調査区西部で南北方向に貫流する、縄文時代と考えられる幅6m程の旧河川と、これが埋没後、上面に設けられた弥生時代前期末～中期前葉の土壙5基・溝3条・中期前葉の竪穴住居の可能性のある柱穴列1ヶ所を検出した。

遺物としては縄文時代前期の曾畠・轟系の土器片、後・晚期の粗製・精製土器片を少量検出したが明らかな遺構は旧河川以外検出されなかった。

古墳時代は前期の土器片を数点検出したが、遺構の検出はない。

古代・中世は田村遺跡群内では珍しく、一片の土器も検出されなかった。遺構は全く見当たらぬ。早良平野において該期の中心集落と目される遺跡だけに全く意外である。遺跡群内の東縁辺には近く、中心からはずれているが、更に東の1次調査区では10世紀代の土壙が検出されている。古墳時代以降、集落からははずれた地域であり、北隣地の17次調査区でも同様の結果が出ている。早い時期に集落から切り離され、水田化していたと考えられる。

今回の調査の中心となる時期は弥生時代である。田村遺跡群内では現在までに20次にわたる調査が実施されているが、この中で弥生時代に関連する遺構・河川等を検出したのは第2・3・4・5・17・20次調査区の6地点で、このうち集落を検出したのは第3次と17・20次調査区のみである。位置的には3次調査区は遺跡内の中間に位置しており、中心集落と思われる。第17・20次調査区は、これより300m程北東の遺跡の北東辺縁に近く、これとは別個の集落と考えられる。



Ph. 16 その他の出土遺物

Fig. 13は第17次調査区と20次調査区の遺構分布図である。17次調査のSD01と20次調査のSD05は一連の溝で、ゆるいS字を描きながらN-22°-W方向に延びて、集落の東を画している様で、両調査区とも溝の東では遺構が極端に減る。これに切られる中期初頭のSD25・27は北西のN-73°-Wに延び、17次調査区の西部が延長上にあるが、検出されておらず、ここまで延びていない。

同一の溝でありながら17次調査区のSD01では中期後半の土器が中心に、20次調査区のSD05では中期初頭～前業が中心で、時期にズレが生じているが、出土状況からして生活残滓が堆積している状態であり、溝に近い住居の時期差が表出したものと思われ、南側から北側へと集落が移行していると考えられる。20次調査区内では検出の失敗もあって明確な住居の検出はないが、溝西側の5m程の円を描いて列する柱穴は住居址である可能性が高い。

17・20次調査区の集落の近辺で同期の遺構を探すと、南側140m程の位置にある、第4次調査区の溝SD01がある (Fig. 14)。SD05と近いN-32°-Wに方位をとる溝で、これを延長するとほぼ90mの間隔で平行する位置関係にある。4次調査区で集落が明確でない事、東西方向の溝がまだ検出されていない事で、環濠の可能性は現段階では断言できないが、少なくともこれは集落の西を区画する溝の可能性を秘めている。今後、この周辺での開発行為には更なる注意を要する。

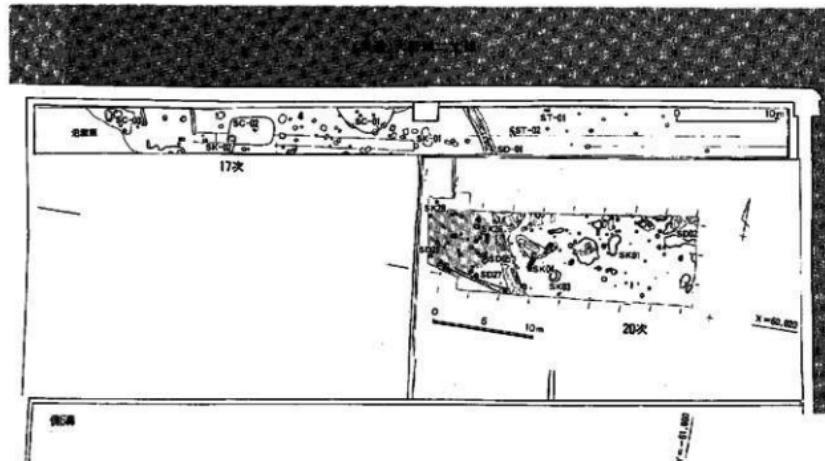


Fig. 13 17次・20次遺構分布図 (1/500)

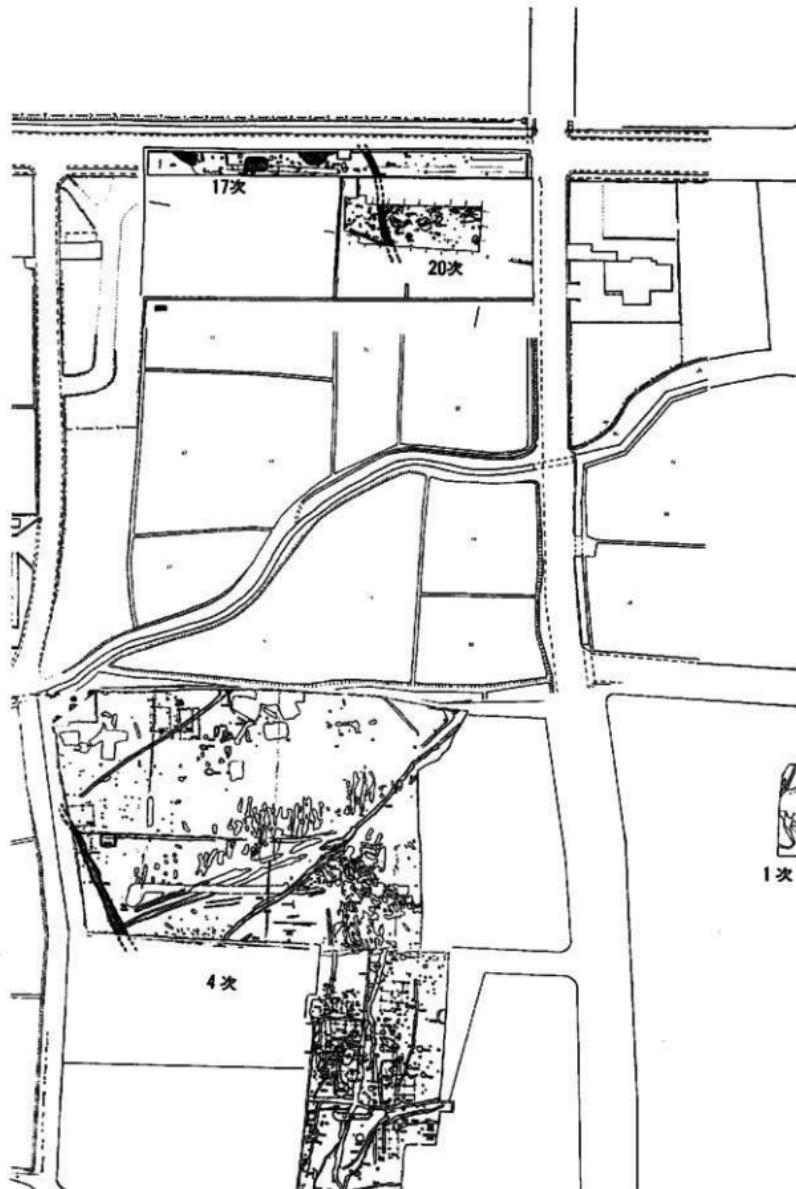


Fig. 14 弥生時代遺構分布図 (1/1,000)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第611集

田村 14

-田村遺跡群第20次調査-

1999年（平成11年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 明和印刷(株)  
福岡市早良区原1-30-30

